

発話行為談話の調査・分析方法－勧誘談話を例に－¹

Analysis of methodology used in speech act discourse research, focusing on invitations.

武田 加奈子（中央学院大学兼任講師）

Kanako TAKEDA (Chuo Gakuin University)

Abstract:

This paper summarizes recent research concerning speech acts (requests, invitations, refusals) and categorizes the data collection methodology into three types. Some problems regarding research methodology and analysis will be pointed out, and then another method of natural discourse data collection (Takeda 2006) including analysis examples will be presented.

1. はじめに

どのような研究においても、分析対象の選定や収集は、研究者が最も神経を使う点であろう。発話行為のような言語行動を分析する場合は特に、どのような側面に焦点をあてた場面設定にするのか、条件はどこまで統制するのか等、頭を悩ますことが他よりも多いと思われる。自然談話を扱うことが望ましいと考える研究者は多いが、様々な調査上の障害により実現は困難が伴う。そこで本稿では、先行研究における調査方法の種類をまとめ、それぞれの調査方法の長短所の確認を行う。そして、実際に筆者が行った勧誘談話収集法の具体的な内容を示し、どのような分析に利用できたかを紹介する。

2. 発話行為談話に関する先行研究

発話行為は、「命題的意味と発語内の力の両方を持つ文または発話」と定義されている²。つまり、発話することがそのまま行為としての機能を担い、相手に影響を及ぼす発話類である。現在では言語哲学の分野よりも、第二言語習得や社会言語学の分野で盛んに研究され、依頼、断り、ほめ、謝罪などが研究対象としてよく取り上げられている。日本語についても、それぞれ 90 年代前半から研究が進み、中国語、韓国語、英語、ドイツ語等との対照研究が行われている。また、さまざまな母語の日本語学習者と日本語母語話者との対照研究も行われてきた。

言語に関する研究に限らず、データ収集法は研究テーマ、そして明らかにする内容は何かによって選択されなければならない。しかし、発話行為に関する先行研究の調査方法を見ると、大半の研究のデータ収集法は質問紙調査とロールプレイ調査の二種に集約され、且つ、「実際に使用されている発話を分析するため」にその調査方法を選んだとしている研究も少なくない。どの調査方法にも一長一短があり、万能な方法はないが、その中でも適しているものは何かを十分検討し、選ばれるべきであろう。その際には、一つの調査方法に固執せず、ネウストブニー・宮崎（2002）で提案されている「複合化された方法論の使用」が最も現実的な方法とも言える

が、ここではまず、各調査方法の特徴と、それを採用した先行研究についてまとめておく。

2.1 先行研究における調査方法

発話行為に関する研究、特に依頼や断りの研究目的は、初期は語用論的転移や文化差の確認が多く、主に英語と他言語との比較が行われていた。その後、日本語においても研究が進み、日本語と他言語との対照のほか、ポライトネス・ストラテジーに着目した研究が現れた。

依頼や勧誘、ほめ、断りなどの言語行動は一人で行うことは不可能である。その媒体がたとえ手紙やe-mailであったとしても、その向こう側には必ず相手が存在し、当事者はそれを想定して行動する。依頼談話の場合は、働きかけ側と受け手側の二者のうち、注目され、研究対象にされるのは働きかけ側である依頼者であり、断り談話では当然のごとく、受け手側にあたる被依頼・勧誘者（つまり断る側）である。ほめについては、ほめへの返答の分析が行われているようだが、依頼や断りでは、それらの行為の受け手も含めて分析している研究はまだ少なく、一方向的な研究が大半を占める。

また、発話行為上、何か問題が生じた場合、人格上の問題とうけとられる可能性が高いということが、発話行為の語用論的研究の根拠として挙げられているが、その判断をする者は誰なのかという問題もある。その時の言語行動は適切だったのか不適切だったのか（その時のインターアクションは不快だったのかどうか）を感じることができるのは当事者だけである。実際、調査者が問題視するところと参加者自身が意識するところ（留意するところ）は違う点もあるが、現在は調査者による判定か、第三者である判定者（評価者）を設定した調査が多い³。

依頼や勧誘のような日常的に起こるコミュニケーション上の問題を扱うには、実際の会話場面を収集し、分析を行うのが望ましい。しかし、調査者が入り込んだ時点でそれはもう自然な会話場面とは言えなくなってしまう。調査対象のコミュニティにとけ込むことから始め、コミュニティの一員として参与観察を行う方法もあるが、時間的な制約がある場合は難しい。また、インターアクションを詳細に分析していくには、複数の録音・録画機材で記録することが望ましいが、自然な場面に機材を持ち込むことは不可能に近い。

ほめ、依頼、断りなどを研究対象にしている研究者らが、既に1980年代から調査方法についての考察を行っている。最初に方法論上の妥当性と改良の必要性を指摘したのは、1985年のBeebe& Cummingsによる、電話会話とDiscourse Completion Test (DCT)による断りの比較研究であるとRose & Ono (1995)で報告されている。ほかに、Rose (1992, 1994), 熊取谷 (1995), 小玉 (1996), Cohen (1996), Beebe & Cumming (1996), Gass & Houck (1999), 武田 (1999), Turnbull (2001), Golato (2003)などでも検討され、自然な会話をデータとして収集することが望ましいということではどれも一致している。しかし、実際に調査を行う場合には、どの調査方法を採用するかについては各研究で意見が分かれている⁴ように、実現には障害が多い。

以下、調査方法別に依頼、勧誘、断りについての先行研究をまとめ、問題点を明らかにする。

2.2 質問紙調査

質問紙調査（アンケート調査）は、調査対象者の選定、場面の設定などが比較的容易であり、

大量にデータ収集し、統計学的に処理することも可能なため、ある一定の傾向を見ることができることが強みである。そして、Blum-Kulka, House & Kasper (1989) の Cross Cultural Speech Act Realization Project (CCSARP) のように、様々な言語で同じ内容の調査を行うことで、言語間の比較もできる。

アンケート調査の形式は、多肢選択型 (Multiple Choice Questionnaire = MCQ,)、談話完成型 (Discourse Completion Test = DCT)、自由記述型の3種に分けられる。DCTはBlum-Kulka (1982) のアメリカ人へプライ語学習者の依頼についての調査で初めて発話行為研究で使用されたと言われており、依頼、謝罪に限らず、断り、不満表明等、多くの研究でDCTが採用されている。

DCTは、会話文提示により文脈や場面が示されているため、被調査者にとって場面を想起しやすいという特徴がある。調査目的の発話を引き出すための記入欄直後の応答 (rejoinder: 断りの場合は、「じゃあ、また今度」、「そうか、じゃ、ほかの人に頼んでみるよ」等) があるのが通常の形であるが、そのような行動をとるかどうかの選択肢も与えるべきだとして、rejoinderをわざと設けない形式を用いる研究も出現した。また、依頼に対する返答部分を2回設けた、two-turn Discourse Completion Test も開発されている。

2.2.1 依頼

Blum-Kulka, House & Kasper (1989) では、謝罪と共に大規模な調査が行われ、言語による差を報告している。この時に作成された分析方法 (Coding Manual⁵) は日本語の発話行為分析にも影響を与え、同じ方法による九言語調査が日本語非母語話者を対象に行われている (橋元 1992, 笹川 2000)。その後、DCTを口頭で行う oral DCT は、韓国語母語話者と韓国系アメリカ人の依頼・謝罪についての対照研究を行った Koo (2001) で採用されている。

しかし、日本語の依頼研究に限って見れば数は少ない。断りや謝罪とともにデータ収集を行い、日本語非母語話者の日本語回答の文末表現を中心に分析した鮫島 (1998)、日本人とメキシコ人のポライトネスについて比較した大倉 (2000) があるものの、調査方法として DCT が採用されることはないようだ。MCQ や自由記述型アンケートを採用している研究がいくつか見られる (ナカミズ 1992, 中川 1997, 田中 2001・2004) が、他の多くはロールプレイでデータを収集している。

2.2.2 勧誘

海外での調査研究でも、依頼や断りについての文献は多数あるが、勧誘のみを扱った研究は管見の限り見られない。日本語についても圧倒的に数が少なく、断り研究の中で「勧誘に対する断り」という引き金 (trigger) としての位置づけで見られる程度である。それらは本稿では断り研究として扱う。

2.2.3 断り

学習者を対象者にした研究 (Beebe, et al.1990, Hayashi1992) のほかは、母語による差異

を明らかにする研究 (Nelson, et al.2002) が行われている。これは日本語についても同様である。また、依頼のようにロールプレイ調査への偏りではなく、半数程度が何らかの質問紙形式をとっているのも特徴である。生駒・志村 (1993) でも指摘されているように、当初は「発話行為上の誤りは、文法上の誤りと違い、人格上の問題と誤解されやすい」という語用論的な視点から注目されていた。多くは日本語と他言語との対照研究の様相を呈し、現在までに、英語との対照研究のほかに、中国語、韓国語などの対照研究や、マレー語、タイ語、インドネシア語母語の日本語学習者との対照研究が見られる。

日本語の「断り」についての研究で一番古いものは、Ueda (1974) の論考になる。これは内省に基づく考察であるが、一部 MCQ も利用しているようだ。その後は、断りの方略（ストラテジー）について、MCQ によりデータ収集した森山 (1990) や DCT を利用した生駒・志村 (1993) など、1990 年代前半まで断りについての研究は見られない。生駒・志村らの研究は、Beebe, et al. (1990) の研究をもとに日本語での断り行動について分析を行った最初の研究であるが、同じように語用論的転移の有無を考察している研究には、藤森 (1994, 1995), 山口 (1996, 1997), 村井 (1998), 元 (1999 他), 顧・趙・董 (2000), ルンティーラ (2004) などがある。伊藤 (2001) は DCT のデータを利用して、マレ一人と日本人のポライトネスについて対照分析をしている。

山口 (1996, 1997) や元 (1999 他) では、DCT のデータを補うためのインタビューやアンケートも行われている。

2.2.4 質問紙調査の効用と注意点

発話行為研究の分野で最初に行われた調査はアンケート調査であると考えられるが、それ依頼、近年でも根強い人気がある調査方法である。これまでの研究で行われてきたように、回答にどのような発話要素が含まれているか、日本語母語話者と他言語の母語話者、あるいは日本語非母語話者ではどのような差異があるかなどの質問紙による調査・分析は、各国語での翻訳による調査紙が作成できれば可能であると考える。大規模調査ならではのデータの数値化や統計処理により、母語・文化による傾向を見ることができる。

しかし、回答は被調査者の実際の発話を正確に記入したものではなく、どのように行動し、発話するのが望ましいと思うかという、自己の文化での行動パターンに対する意識調査となっていることに注意しなければならない。様々な研究で指摘されているような語用論的転移は存在すると思われるが、実際使用場面の調査結果として扱うことは難しい。田中 (2001) のように、「(アンケートは)「こうあるべき」という回答者の規範意識を反映していると思われる。従って、これらの表現は日独双方で依頼表現を学ぶ際の初步段階で示されるのに適した表現であると考えられる」と、アンケートの特徴を理解した上で使用するのが適切であろう。本来、「アンケート調査は、比較的に規模の大きな集団の意識調査をする際に有効である。言語意識調査のほかに、対象者の意識と関わらない組織や制度、さらにはパーソナル・ネットワークなど」を明らかにするのに適した調査である (村岡 2002)。この点において考えても、アンケート調査を発話行為の実際使用状況の分析として生かせるかどうかは疑問である。

また、アンケート調査は場面の設定が容易ではあるが、本人に経験がない場面は設定不能である。経験のある場面であっても、その時のことを正確に思い出して回答することは難しい。

経験を報告させるには、自由記述型アンケートやインターアクション・インタビュー（ネウストロニー1994）などの方が適していると考える。

そして、依頼や断り等の発話行為が一発話で完遂することがほぼないこと、イントネーションや非言語行動も相互行為には大きく作用することなどからも、アンケート調査によるデータの扱いには注意を要す。カノックワン（1997）でも、「うーん」などの間投詞や「かな」のような文末表現の重要性から、書き込み式調査に対して疑問を投げかけている。

2.3 ロールプレイ調査

一方、もう少し実際の会話に近いデータ収集法としてロールプレイ調査が採用されるようになった。ロールプレイ調査では質問紙調査とは違い、録音や録画が行われるため、会話時の声の調子やイントネーションによる差異、非言語行動なども分析可能になる。また、DCT のように決められた会話文にあてはまるような発話を考えるのではなく、会話相手（ロールプレイの相手）の発話に応じて瞬時に応答するという、即興性が加わり、この点でも質問紙調査より実際の会話に近いと言えるだろう。近年、ロールプレイ後にインタビューを行ったり、open role play 方式（Gass & Houck1999）で調査を行うなど、多様化が見られる。

2.3.1 依頼

依頼に関する研究では、ロールプレイで調査を行う研究は比較的多い。日本語では熊井（1992）が最初に行ったと考えられるが、その後、中間言語の観点から日本語／中国語母語話者の日本語依頼場面を扱った水野（1996a, 1996b）、接触場面の観点から日本人とフランス人の依頼について考察した猪崎（2000）、中国語／英語母語話者の日本語依頼場面について録画ロールプレイによる調査を行った池田・三好・村木（2002）、待遇コミュニケーションの観点から分析した田中（2004）、日韓比較を行った柳（2004）などがある。

2.3.2 勧誘

勧誘については、ファン（1998）の1件のみ、ロールプレイ調査による分析が見られるほかは、断りについての調査の中で、引き金（trigger）として勧誘が取り入れられている。

ファン（1998）では、日本語母語話者と非母語話者の勧誘のロールプレイ会話のうち、会話開始部分に着目し、非母語話者の母語による比較分析を行っている。

2.3.3 断り

依頼についての調査を行った熊井（1992）に引き続き、熊井（1993）ではロールプレイデータに基づき、断りについての分析を行っている。その他、母語干渉の観点から中国語母語話者の日本語断り場面を分析をしている山本（1997）、邱（2000）、ポライトネス・ストラテジーについて日韓比較を行った任（2002他）がある。邱（2000）はロールプレイ後にアンケートとインタビューを行い、データの補足をしている。

横山（1993）はフォリナー・トークの観点から、日本語母語話者の非母語話者への断りについての分析を行っているが、他の研究とは逆の視点で断り行動を見ているという点が興味深い。

英語学習者を対象に行ったロールプレイを分析データとした Houck & Gass (1997), Gass & Houck (1999) では、ロールプレイの録画を行うことで、非言語行動まで含めた断りの分析を可能にした。非言語行動に関する分析は日本語ではほとんど進んでいないが、これは断りに限らず、他の言語行動でも同様である。

2.3.4 ロールプレイ調査の効用と注意点

ロールプレイ調査もロールプレイ、つまり演技であることから、DCT と同じような性質、つまり意識調査になる傾向を持っている。そのため、DCT と同じような研究目的のもとで採用されるのが望ましい。しかし、録音（録画）をしていることから、イントネーションやポーズなどの発話に付随する要素や、会話の即興性がある程度入れられるため、アンケート形式の調査と異なる分析はできるだろう。イントネーションの変化や声の強弱、ポーズの有無などについて、言語ごとの特徴を分析することも考えられる。また、テレビドラマや映画などを視聴する際の参考として、調査結果を非母語話者に提供することも可能だろう。

問題点としては、録音や録画を伴うことから、データ数を揃えるためにはかなり大がかりな研究プロジェクトを立ち上げなければならない点が挙げられる。実際には、それほど大量のデータを集めることは不可能と思われるため、一続きの談話としてデータを扱い、質的分析を進めていくことが必要と考える。これまでロールプレイであっても DCT と同様の分析が行われてきているが、今後は録音データとしての特徴を生かした分析が要求されるだろう。

2.4 自然談話調査

質問紙調査やロールプレイ調査も多様化しているが、以上のような問題点の克服は困難であるため、実際の談話の分析を試みる研究が多くはないが存在する。場面の設定やデータ数などでかなり制約があるが、各研究者が工夫をしてデータ収集を行っている。

実際の会話場面を収集する場合、その対象となる談話が自然発的に生じることを待つタイプの研究（柏崎 1993, 高木 2003a, ザトラウスキー 1993, カノックワン 1997, Daly, et al. 2004）と、発生するように設定を行う研究（Kaneko 1992, Kawate-Mierzejewska 2004, 施 2005, 武田 2006）の二種がある。また、どのような媒体での会話を収集するかについても、電話か対面かの二種に分けられる。電話会話は開始と終了が明確であること、非対面場面であるため非言語行動を考慮せずに済むことなど、分析者にとっての利点がある。それに対し、対面の場合は視線や非言語行動も分析に取り入れられることが最大の特徴であり、また、分析の難しさが問題にもなる。

2.4.1 依頼

依頼研究には、実際に大学の事務室で交わされた依頼・要求表現を録音収集し、日本語母語話者と非母語話者の比較分析を行った柏崎（1993）、実際にあった電話会話での依頼・断り談

話のうち、依頼部分についてまとめた高木（2003a）の2件がある。

柏崎（1993）は表現の分析を行い、その上でポーズやあいづちの重要性を指摘しており、その後、このような研究がほとんど行われなかつたことからも注目に値する。

2.4.2 効誘

効誘談話の先行研究として、ザトラウスキー（1993）を省くことはできない。日本語母語話者に協力を要請し、録音してもらった電話会話から、効誘談話（ここでは誘い、効めの両方を含む）の構造について体系的に分析を行い、「話段」という談話上の単位を提案している。この「話段」の概念は、その後、他の研究（依頼、談話構造）でも利用されている。

2.4.3 断り

実際の断り談話を録音して分析している研究のほとんどは電話会話による調査で、武田（1998）と Daly, et al. (2004) のみ、対面場面の録音調査を分析している。

カノックワン（1997）、高木（2003b）、Daly, et al. (2004) は柏崎（1992）やザトラウスキー（1993）同様、自然発生的に生じた依頼（・断り）の電話会話を収集し、分析した研究である。最も実際場面に近い談話資料が収集できると思われるが、効率的にデータを集めることは難しい。一方、Kaneko (1992)、武田（1998）、Kawate-Mierzejewska (2004)、施（2005）は、いずれも働きかけ側がコントロールされた会話の分析をしている。しかし、被依頼者の反応は自然であることから、現在、最も実際場面に近い会話を効率的に収集することができる調査方法と考えられる。Kaneko (1992)、武田（1998）、施（2005）では談話収集後にアンケートやインタビューも行っている。

2.4.4 自然談話調査の効用と注意点

調査紙やロールプレイによる調査では、実際使用場面を反映していないという問題があったが、自然談話の調査はそれを解決することができる。ロールプレイ同様、実際の発話が分析対照であるため、ポーズやイントネーション、声の強弱なども分析に取り入れることが可能である。また、談話開始から終了まで、一続きの談話が収集できることから、談話の流れを見ることもできる。

しかし、現実ではどのような言語行動が行われているのかを分析するために談話を収集してはいるが、完全に自然な場面とは言えない。上に挙げた研究も、会話参加者の片方がコントロールされているか、録音主体であるため、完全に調査から解放されているわけではない。また、データとするには録音や録画などが必要となり、隠し撮りをする以外に完全な自然談話を手に入れることは不可能である。談話収集後、会話参加者にインタビューやアンケートを行うためには、調査であることを明かさねばならず、被調査者にことわりなく録音・録画を行うことは諸処の問題もあり、非現実的だ。

また、依頼や誘いに対する応答が承諾であるか断りであるかはロールプレイのように決定されていないため、断りの研究を自然談話をもとに行おうとすると、よりいっそう困難が伴うだ

ろう。

これらの点からも、大量のデータ収集が難しいため、質問紙調査で分析するような母語や文化による傾向などは出しにくい。また、依頼や勧誘の内容によっては、調査時期が限定されたり、依頼者や勧誘者が限定されてしまうなどの弊害が想定される。

2.5 その他

伝統的に文法研究で行われてきた作例や小説等からの例文の検討、語学テキストの会話、ドラマや映画台本などの分析が、依頼、勧誘、断りだけではなく、他の言語行動研究でも見られる。ほかに、DCT やロールプレイで得られた会話を評価させる研究なども行われているが、発話行為の研究としてよりは評価研究として位置づけられているようだ。

2.6 接触場面と発話行為

以上、調査方法別に見てきたが、接触場面の観点から見直してみたい。

接触場面とは、異なる言語、文化背景を持つ参加者が少なくとも1名は含まれているインター アクション場面で、内的場面（母語場面）とは異なる特徴を持つ（ネウストプニー1981）。近年、接触場面研究は飛躍的に増加し、日本語における発話行為研究でも、接触場面を対象とした研究は増えてきた。しかし、接触場面と内的場面が根本的に異なるという研究結果が示されている（Neustupný1985, Neustupný1994b, 加藤 2002, フェアブラザー2002 他）ことからも、内的場面の分析結果を日本語教育に応用することは難しいことになる。

接触場面の調査結果は、言語教育や異文化間教育には有効で、非母語話者に限らず、接触場面に参加するすべての者に、接触場面の実態として提供可能であるが、接触場面のみのデータでは、参加者の母語、文化からの干渉や接触場面特有の現象などは確定できないという欠点がある。一方、2つ以上の内的場面（母語場面）の調査とその比較は、言語間の差異を見出すには有効と考える。母語、目標言語、学習言語の3種のデータが揃えば、語用論的転移の発見には使える可能性があるが、上述のように、非母語話者にそのまま結果を還元することは難しい。

これまで見てきた先行研究、ここでは断り研究について、扱っている場面や参加者、アンケート回答者から、内的場面と接触場面のどちらに着目しているかで分類してみた結果を「付表」に示した。母語で回答した DCT 調査やロールプレイ調査の分析は内的場面とし、第二言語、外国語教育の観点から、非母語話者の調査結果を取り上げている研究は接触場面の研究とした。母語話者と非母語話者の対照を行っている場合は、「接（接触場面）」と「内（内的場面）」の両欄に印を付けている。この表から、「接（接触場面）」に印のある研究が多く、一見、接触場面の研究が中心になっているように見えるが、問題は、接触場面研究としての意識が分析者にないため、母語話者と非母語話者の発話の差異を求める分析になってしまっている点である。発話行為に関する接触場面研究が未発達である現在では、母語話者が非母語話者に対し、内的場面と同様の期待をしているかが明らかになっていないため、母語話者、非母語話者それぞれの回答を単純に比較し、差異を指摘するのは危険であろう。

3. 武田（2006）における調査の概要

武田（2006）では、実際に非母語話者は接触場面でどのような（勧誘）談話に参加しているのか、そこに何か問題は生じているのか、参加者は談話上のどのような発話や非言語行動を重視しているのか、等を明らかにしようと考え、調査の計画を立てた。具体的には、武田（1999）で紹介した調査方法に改良を加え、接触場面の談話を収集することにした。以下に、調査方法開発の基礎となった、Kaneko（1992）のダミー・インタビュー⁶と、武田（1999）の調査方法を簡単に紹介する。

3.1 調査方法の開発

3.1.1 Kaneko（1992）の調査方法

Kaneko（1992）は依頼の応答についての研究であるが、フォローアップ・インタビュー⁷（ネウストニー1994a、ファン2002）を有効に利用し、被依頼者の心の動きを詳細に記述することに成功している。実際の調査は次のような段階を踏んで行われた。

- (i) 準備：インタビューの依頼
- (ii) インタビュー（ダミー・インタビュー）
- (iii) 依頼（メイン・インタビュー）
- (iv) 謝罪：(iii)が調査のための依頼であったことの謝罪と調査目的の説明
- (v) フォローアップ・インタビュー

Kaneko（1992）より抜粋 筆者訳

被調査者には調査の目的はダミー部分のインタビューであると説明しているため、ダミー・インタビューでは回答時の表現に影響が出ているかもしれないが、その後のメイン・インタビューでは自然な反応が現れていると考える。ただし、Kaneko（1992）の場合はメイン・インタビューでの依頼者も、その後のフォローアップ・インタビューも調査者本人が行っているため、依頼者側が調査のための依頼であることを認識した上で実行してしまっている点や、依頼者へのフォローアップ・インタビューが不可能であることなどの問題点がある。

3.1.2 武田（1999）の調査方法

武田（1999）では Kaneko（1992）の問題点を克服するため、調査者以外の日本語母語話者と非母語話者との接触場面の会話を設定し、本来の調査目的を告げずに会話の録音を行った。

- (1) 調査方法の説明
- (2) ダミー
- (3) メイン
- (4) 調査目的の説明
- (5) フォローアップ・インタビュー

武田（1999）より抜粋

調査方法の説明は1名ずつ別々に行い、本来の調査目的である依頼・勧誘の実施については片方にのみ行った。Kaneko（1992）でのダミー・インタビューにあたるダミー部分は自由会話とした。メイン・インタビューに相当するメイン部分は、自由会話の最後になるように依頼者・勧誘者側に指示し、録音や会話相手に慣れてから実施するようにした。

この調査方法は、依頼者・勧誘者側の操作はしているが、被依頼者・被勧誘者側の操作はしていない。つまり、被依頼者・被勧誘者に限れば自然な反応であると言える。また、依頼や誘いの内容は、基本的には依頼者・勧誘者となる調査協力者本人が、自己の生活の中から実施できる依頼や誘い内容を考えているため、(4)の説明は行わないこともあった。

しかしこの調査方法にも問題点はある。まず、依頼者・勧誘者となる調査協力者（母語話者）本人からの依頼や誘いでなければ意味がないため、基本的に本人にその場で考えてもらったが、すぐには思いつかなかつたり、依頼や勧誘の内容に差が出てしまったことである。また、初対面同士の接触場面であったため、依頼や勧誘の内容もそれに影響されるはずであったがそれを考慮できなかつた。

3.2 武田（2006）の調査

3.2.1 調査協力者

次に、3.1.で紹介した研究の問題点をもとに計画、実施した武田（2006）の調査内容を具体的に紹介する。武田（2006）では勧誘談話の分析を行ったが、ロールプレイにならないために、誘いが実行可能である者に調査を依頼することが最も現実的であると考え、調査協力者を選定した。

勧誘者には、誰でも参加可能な誘い内容を持っていることを調査者が知っている日本人学生（日本語母語話者：NS）に協力を要請した⁸。みな同じ音楽系サークルに所属しており、その団体では年に二回演奏会を行っていた。

会話相手は、留学生センターで日本語補講（初級・中級レベル）を受講していた11名（主に理系学部の研究生）、理系学部生2名、理系大学院生1名、提携大学からの短期留学生（大部分が日本語専攻）10名などの留学生（日本語非母語話者：NNS）である。調査当時、滞日歴約2か月～2年であった。勧誘や断りなどの社会言語的なルールの影響が多分に予想される言語行動では、学習歴よりも滞在歴に左右されやすいのではないかと考え⁹、より問題が発生しやすいと予想された、比較的滞日歴の短いNNS、あるいは、日本語を専門として学習しておらず、研究室では日本語使用の少ない理系の学生に協力をお願いした。

調査を行う際には、NNSの母語、性別を統一する方法も考えられたが、NNSの母語や性別、年齢による差の比較はしないため、今回の調査では様々な言語・文化背景の協力者を募った¹⁰。NSとNNSの組み合わせは調査者が任意で行い、すべて初対面同士の同性ペアに設定した。

3.2.2 調査手順

1組のペアが2回会話をするように計画を立て、その後、個別にフォローアップ・インタビュー

を実施した。

- | | |
|--|---------|
| <u>1) 会話の録音・録画 1回目</u> | 10分～15分 |
| <u>2) 会話の録音・録画 2回目</u> | 15分～30分 |
| <NS から NNS へ> 「自分の所属する音楽系サークルの演奏会への誘い」 | |
| <u>3) フォローアップ・インタビュー</u> | 30分～1時間 |

以下の点を注意して調査を実施した。

1) 日本人学生 (NS) と留学生 (NNS) 2人の自由会話 1回目

- ・調査協力者の関係作りを目的に自由会話を実施する。
- ・ビデオへの慣れのため、録音・録画を行う。

2) 日本人学生 (NS) と留学生 (NNS) 2人の自由会話 2回目

- ・2回目の録音日は演奏会直前の1, 2週間の間に設定し、1回目と同じ部屋、機材を使用する。
- ・調査者から NS へ誘いの提案をする¹¹。
- ・ロールプレイではないことが重要であるため、無理強いはせず、教示も使用しない。
- ・調査者は基本的にその後の連絡等、誘いに関する仲介は行わない。

3) フォローアップ・インタビュー

- ・勧誘談話部分を中心に全体的に実施する。
- ・2回目の会話録音後、1週間以内に行う。
- ・ロールプレイではないため、NNS への本来の調査目的の説明は必要な場合のみ行う。
- ・心理的な部分についても報告してもらうため、初級レベル NNS であっても、通訳を介さず、直接本人にインタビューする。

ビデオ録画や録音機材を顔の表情を映せるように設置すると、どうしても視界に入ってしまい、影響がないとは言い切れないが、勧誘談話は調査2日目になるため多少慣れもあると思われること、勧誘部分は必然的に目の前の会話相手に集中していることから、分析に値する会話が収集できたと考える。

以上のような調査設定にしていたため、調査期間が限定され、一時期にまとめては収集できなかった。調査は2002年～2003年の間に三度に分け、計24ペアの談話を収集した。

3.3 会話資料のデータ化

収集した談話資料はすべて文字化した。ザトラウスキー(1993), 宇佐美(1997)などを参考し、意味内容がすぐ理解できるように漢字仮名交じりで文字化を行った。調査ではビデオカメラとMDで談話資料を収集した。主に録音データから文字化し、録画データでもう一度文字

化資料を確認し、非言語行動を適宜付け加えていった。フォローアップ・インタビューも分析に利用できるよう、簡単に文字化した。

4. 分析例

4.1 勧誘談話部分の選定

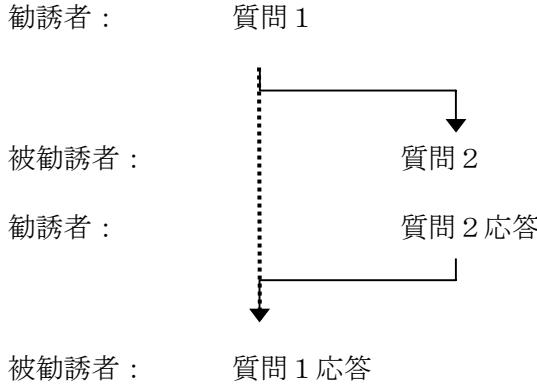
調査では勧誘談話のみを録音・録画したのではないため、NS・NNS二者間の自由会話の中に勧誘談話が埋もれている場合と、録音開始直後に勧誘談話が始まった場合、録音終了直前に勧誘談話がある場合など様々であった。始まりと終わりがはっきりしている場合もあるが、その他の場合はどこからどこまでを勧誘談話として切り取るか検討が必要であった。

武田（2006）では、始まりの部分は、勧誘内容に関する話題を導入した時点から勧誘談話開始と考えた。勧誘者と被勧誘者で勧誘談話が開始した、あるいは終了したという意識が一致していない場合もあるため、調査者（筆者）が判断を下した。勧誘談話の内容が終わった部分か、断りか承諾かの結果が分かり（誘い応答部）、その後の談話終了処理（感謝、謝罪、次の誘いなどの実施）が行われていればそこまでを勧誘談話とすることにした。

4.2 談話からの発話抽出

勧誘談話部分を特定した後、一定の基準を設け、談話から発話を抜き出していった。この抽出に、言語管理プロセス（Neustupný 1985, 1994b, ネウストプニー 1997 他）の逸脱の留意という概念と隣接応答ペア（adjacency pairs: Sacks, Schegloff & Jefferson 1974）を援用した。参加者に意識化された発話や非言語行動で談話上に表出した場合は、談話資料や録画資料の分析により、勧誘者が留意しているかどうかを確認できる。談話上に表出しない場合も、勧誘者からの報告があれば分析対象とした¹²。談話の分析方法は、研究目的により様々であるが、談話の中で何が参加者にとって重要視されるのかを確認するため、まず、談話から参加者に意識化されている発話を抜き出し、その後、先行研究で実施されている意味公式や発話構成要素と言われる発話の分類を行い、最後に談話ごとの流れを見る、という方法を採った。

具体的に抽出は次のように行った。まず、隣接応答ペアのルールに合わない発話、非言語行動を抜き出した。文字化した談話資料を、会話のやりとりの最小単位である隣接応答ペア（挨拶－挨拶、質問－応答等）のルールに対する逸脱という観点で見ていき、該当するものをすべて抜き出した。機械的に抽出していくと、参加者によって意識化されていたものと、そうではないものが含まれている可能性がある。そのため、次のような点にも注意した。抽出した被勧誘者 NNS の発話、非言語行動の、次の勧誘者 NS の発話、非言語行動には、何らかの特徴（笑い、または笑いを含んだ発話、イントネーションなどにより強調された発話、直前の NNS 発話の内容の訂正等）がある場合とない場合がある。前者については、直前の NNS の発話、非言語行動に何らかの留意があった（意識化された）と考え、談話から取り出した。これにより、最小単位の隣接対ではない次のようなパターンにも対応できる。



隣接応答ペアのルールに則れば、勧誘者の「質問 1」には「質問 1 応答」が続くべきであるが、上記の例では直後に位置しておらず、被勧誘者の「質問 2」はルールに違反したとして談話から取り出されることになる。しかし、勧誘者の「質問 2 応答」に笑いや声の強弱等による強調がない限り、分析対象からは外した。発話抽出の具体例は武田（2004）を参照されたい。

抽出した発話には、意味公式の一つの発話機能だけが含まれているとは限らない。例えば、「あー結構とおいんじやないですよね（遠いですよね）」という発話が抽出されたが、これを意味公式の通常の分類方法に従うと、「間をもたせる表現」と「批判（否定的な意見）」が1件ずつ出現したことになり、そのように数値化していく。武田（2006）では、フィラー「あー」は採用せず、より注目されているであろう部分として意味内容を伴った「遠いですよね」を〈意見〉として分類時に採用している。フォローアップ・インタビューで報告のなかつたものについては調査者による推測の域を出ないが、この時点では省いたフィラー等は、シグナル（次節参照）を詳しく考察するときに考慮することにした。

このように抽出していくと、抽出された発話の中には勧誘の結果（承諾や断り）に関係がない発話も含まれていることになる。接触場面の調査であるため、相手の発話が分からず、聞き返す、訂正するなども多発し、それらも抽出される可能性がある。しかし、それらを含めた発話の中で、どの程度の発話や非言語行動が承諾や断りに関係しているのかを確認するのも、発話行為を研究対象とする場合には必要になると考えた。理解できなかった点について確認したことなどが、断りのサインであると解釈される場合もあるためである。

4.3 抽出した発話、非言語行動の分類

アンケート調査ではなく、実際の談話をデータとしており、また、断りに限定せず発話、非言語行動を抽出するため、上述のような断りの中核となる発話以外の要素（分からぬ言葉に対する確認要求等）が多数出現する可能性が考えられた。実際に抽出した発話、非言語行動を種類ごとに分類すると、Beebe, et. al (1990) などでも分類項目として見られるタイプの発話類（言い訳や直接的な断り、謝罪等）と、それ以外の発話類（情報要求やあいづち）の大きく2つに分けることができた。これを勧誘談話管理とインターアクション管理と名付けた。

全発話について、承諾や断りに関係すると NS が捉えていたかどうかを、NS に対して行ったフォローアップ・インタビューから確認した。承諾や断りに関係すると捉えられていた発話や非言語行動は「シグナル化」しているとし、数や種類を把握し、談話上の位置を確認した。

このシグナルの分析により、インターアクション管理の中にも誘いの諾否を担っている発話、非言語行動が存在することが確認されている。

4.2 で説明した方式により発話や非言語行動を抽出したが、実際には表面には現れないが参加者が留意していた発話もあると考え、フォローアップ・インタビューで報告があった発話も分析対象に含めた。抽出した発話、フォローアップ・インタビューで報告された発話を合わせると 198 件にのぼった。その内容を以下に示す。

表 1： 発話分類表

分類項目		抽出発話	抽出・報告発話	報告発話	計
勧誘談話管理	【A-1】承諾類	感謝	1	0	1
		希望	2	2	1
		興味・関心	2	2	2
		実行意思	2	2	0
	【A-2】断り類	意見	1	2	1
		遺憾	1	1	1
		事情・都合	4	4	8
		実行不可	1	0	0
		代案	0	1	0
		保留	0	3	4
インターアクション管理	【B】情報の伝達・応答	応答	4	3	1
		確認	4	3	3
		確認要求	22	19	6
		情報提供	6	15	9
		情報要求	10	10	8
	【C】あいづち他	あいづち	2	1	2
		フライ	0	1	2
		笑い	2	0	0
		沈黙	1	3	0
		表情	1	1	4
	【D】その他	はげまし	1	0	0
		ほめ	0	2	0
		依頼	0	1	0
		評価	1	1	1
計		68	78	52	198

抽出発話： 談話から抽出した発話、非言語行動

抽出・報告発話： 談話から抽出され、且つ、フォローアップ・インタビューでも報告された発話

報告発話： 談話からは抽出されなかったが、フォローアップ・インタビューでは報告された発話

表 1 より、談話からの発話抽出とフォローアップ・インタビューでの報告は、同一ではないことがわかる。フォローアップ・インタビュー調査も万能ではない¹³ため、談話を詳細に分析する際には、どちらかの方法に偏重しないような配慮が必要になる。

5.まとめと課題

5.1 武田（2006）の調査・分析の結果

これまで見てきた自然談話調査、発話抽出、発話分類により、アンケートでは出現しない発話類が収集できること、それにより、これまでの分類項目では不足すること、フォローアップ・インタビューの重要性などが確認された。その他、武田（2006）では、シグナル化した発話の談話上の位置の分析や、参加者双方に行ったフォローアップ・インタビューの結果から談話の捉え方の相違の分析などを行った。その結果、1つの談話にシグナル化した発話が1つとは限らないこと、発話の談話上の出現位置により、シグナル化が左右されること、非母語話者の日本語面に関する問題に母語話者が気づかず、シグナルであると解釈することがあることなどが明らかになった。ロールプレイのように結末があらかじめ決められていないことから、承諾の方向で進んでいた談話が断りに転じたり、断り談話の中に承諾類の発話が出現するなど、多様な談話を収集し、考察することができた。また、フォローアップ・インタビューを行ったことで、第三者の評価ではなく、談話参加者本人の評価を分析に取り入れることができた。

5.2 課題

2.4.4.や3.2.2.で述べたように、自然談話調査では、調査時期が限定されたり、一度にデータ数を揃えらなかつたりなど、大量のデータ収集は難しい。また、大量のデータを扱えないため、文化的な傾向などは出しにくい。そして、フォローアップ・インタビューも必須であるが、談話資料の収集時間のほかにインタビュー実施の時間を割いてもらわねばならず、調査協力者には負担になってしまうため、効率よく調査を進めるために調査者の技量も要求された。

分析の課題としては、先行研究が積み上げてきた成果との乖離がある。これまでの量的分析や内的場面の分析で明らかにされている言語、文化的特徴を踏まえるなど、先行研究との連携が、今後必要になるだろう。

引用文献

- Beebe, L. M. and Cumming, M. C. (1996) Natural speech act data versus written questionnaire data: How data collection method affects speech act performance. In Gass, S. M. and Neu, J. (eds.) *Speech acts across cultures: challenges to communication in a second language*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter, pp.65-86.
- Beebe, L. M., Takahashi, T., and Uliss-Weltz, R. (1990) Pragmatic transfer in ESL refusals. In Scarcella, R. C., Andersen, E. S. & Krashen, S. D. (eds.) *Developing Communication Competence in a Second Language*. New York: Newbury House Publishers, pp.55-73.
- Blum-Kulka, S. (1982) Learning to Say What You Mean in a Second Language: A Study of the Speech Act Performance of Learners of Hebrew as a Second Language. *Applied Linguistics*, 3-1, pp.29-59.
- Blum-Kulka, S., House, J. and Kasper, G. (1989) *Cross-cultural pragmatics: requests and apologies*. Norwood; New Jersey: ABLEX.

接触場面と言語管理の学際的研究

- Cohen, A. D. (1996) Investigating the production of speech act sets. In Gass, S. M. and Neu, J. (eds.) *Speech acts across cultures: challenges to communication in a second language*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter, pp.21-43.
- Daly, N., Holmes, J., Newton, J. and Stubbe, M. (2004) Expletives as solidarity signals in FTAs on the factory floor. *Journal of Pragmatics*, 36, pp.945-964.
- フェアブラザー, リサ (2002)「相手言語接触場面における日本語母語話者の規範適用メカニズム」『接触場面における言語管理プロセスについて』 Vol. II (千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告) pp.1-12
- ファン, サウクエン (1998)「英語母語話者と中国語母語話者の点火ストラテジーについて—日本語学習者としての「誘い」—」『日本語・日本文化研究』5(京都外国语大学) pp.35-49
- ファン, サウクエン (2002)「対象者の内省を調査する(I)：フォローアップ・インタビュー」ネウストプニー, J.V.・宮崎里司 (共編著)『言語研究の方法 言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』くろしお出版 pp.87-95
- 藤森弘子 (1994)「日本語学習者にみられるプラグマティック・トランスファー「断り」行為の場合ー」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』1 pp.1-19
- 藤森弘子 (1995)「日本語学習者にみられる「弁明」意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習者の場合ー」『日本語教育』87 pp.79-90
- Gass, S. M. and Houck, N. (1999) *Interlanguage refusals: a cross-cultural study of Japanese-English*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Golato, A. (2003) Studying compliment responses: a comparison of DCTs and recordings of naturally occurring talk. *Applied Linguistics*, 24/1, pp.90-121.
- Hayashi, T. (1992) On Polite Refusal—A Pragmatic Study Based on English Data— 龍谷紀要(The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences), 13-2, pp.87-102.
- Houck, N. and Gass, S. M. (1997) Cross-cultural back channels in English refusals: A source of trouble. In Jaworski, A. (ed.) *Silence: Interdisciplinary Perspectives*. Berlin: Mouton de Gruyter, pp.285-308.
- 池田裕・三好理英子・村木万里子 (2002)「中国語話者と英語話者の日本語における依頼—ロール・プレイによる発話データの分析ー」『多摩留学生センター教育研究論集』3 pp.51-60
- 生駒知子・志村明彦 (1993)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：「断り」という発話行為について」『日本語教育』79 pp.41-52
- 伊藤恵美子 (2001)「ポライトネス理論の実証的考察—心理的負担の度合いを中心に意味公式の数値の観点からー」『日本語教育論集：日本語教育長期専門研修報告』17 (国研日本語教育センター) pp.1-20
- 伊藤恵美子 (2002)「マレー語母語話者の語用的能力と滞日期間の関係について：勧誘に対する『断り』行為に見られる工学系ブミットラのポライトネス」『日本語教育』115 pp.61-70
- 猪崎保子 (2000)「「依頼」会話に見られる『優先体系』の文化的相違と期待のずれ—日本人とフランス人日本語学習者の接触場面の研究ー」『日本語教育』104 pp.79-88
- Kaneko, E. (1992) *Responses to a Request in Australia-Japan Contact Situations*. M.A. thesis,

- Monash University, Melbourne.
- 金子栄子 (2002) 「オーストラリア人と日本人の接触場面での依頼に対する応答：フォローアップ・インタビューの一例」『言語研究の方法』 くろしお出版 pp.186-193
- カノックワン, ラオハプラナキット (1995) 「日本語における「断り」—日本語教科書と実際の会話との比較—」『日本語教育』 87 pp.25-39
- カノックワン, ラオハプラナキット (1997) 「日本語学習者にみられる「断り」の表現—日本語母語話者と比べて—」『世界の日本語教育』 7 (国際交流基金日本語国際センター) pp.97-112
- 柏崎秀子 (1993) 「話しかけ行動の談話分析—依頼・要求表現の実際を中心に—」『日本語教育』 79 pp.53-63
- 加藤好崇 (2002) 「インタビュー接触場面における「規範」の研究」『東海大学紀要留学生教育センター』 22 pp.21-40
- Kawate-Mierzejewska, M. (2002) *Refusal sequences in conversational discourse.* Doctoral dissertation, Temple University.
- 顧明耀・趙剛・董戈 (2000) 「会話における間接表現の日中対照研究」『広島女子大学国際文化学部紀要』 8 pp.103-124
- Koo, D. (2001) *Realizations of Two Speech Acts of Heritage Learners of Korean: Request and Apology Strategies.* Ph.D., Dissertation, The Ohio State University.
- 小池真理 (1998) 「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教師と一般日本人のずれ—初級学習者の到達度試験のロールプレイに対する評価—」『北海道大学留学生センター紀要』 2 pp.138-156
- 小玉安恵 (1996) 「対談インタビューにおけるほめの機能(1)—会話の役割とほめの談話における位置という観点から—」『日本語学』 15-5 pp.59-67
- 熊井浩子 (1992) 「外国人の待遇行動の分析(1)—依頼行動を中心にして—」『静岡大学教養部研究報告人文・社会科学篇』 28-1 pp.1-44 (314-271)
- 熊井浩子 (1993) 「外国人の待遇行動の分析(2)—断り行動を中心にして—」『静岡大学教養部研究報告人文・社会科学篇』 28-2 pp.1-41 (266-226)
- 熊取谷哲夫 (1995) 「発話行為理論から見た依頼表現—発話行為から談話行動へ—」『日本語学』 14-11 明治書院 pp.12-21
- 邱利華 (2000) 「日本語母語話者と中国人日本語学習者の「断り」の対照研究」『比較社会文化研究』 8 (九州大学大学院比較社会文化学府) pp. 57-76
- ルンティーラ, ワンウィモン (2004) 「タイ人日本語学習者の「提案に対する断り」表現における語用論的転移—タイ語と日本語の発話パターンの比較から—」『日本語教育』 121 pp.46-55
- 水野かほる (1996a) 「「依頼」の言語行動における中間言語語用論—中国人日本語学習者の場合—」『言語文化論集』 17-2 (名古屋大学言語文化部) pp.91-106
- 水野かほる (1996b) 「「依頼」の言語行動における中間言語語用論 (2) —directness と perspective の観点から—」『言語文化論集』 18-1 (名古屋大学言語文化部) pp.57-71
- 森山卓郎 (1990) 「「断り」の方略—対人関係調整とコミュニケーション」『月刊言語』 19-8 大修館書店 pp.59-66

接触場面と言語管理の学際的研究

- 村井巻子 (1998) 「「断り」行為の日独比較—詫び表現、共感表現を中心に—」『筑波大学地域研究』16 pp.199-226
- 村岡英裕 (2002) 「質問調査：インタビューとアンケート」『言語研究の方法 言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』(ネウストプニー, J.V.・宮崎里司共編著) くろしお出版 pp.125-142
- 村岡英裕 (2004) 「フォローアップ・インタビューにおける質問と応答」『接触場面の言語管理研究』Vol.III (千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告) pp.209-226
- 中川良雄 (1997) 「日本語依頼の表現—依頼のストラテジーと日本語教育—」『研究論叢』50 (京都外国語大学) pp.218-229
- ナカミズ, エレン (1992) 「日本語学習者における依頼表現—ストラテジーの使い分けを中心として—」『待兼山論叢』26 (大阪大学文学部) pp.49-64
- Nelson, G. L., Carson, J., Al Batal, M. and El Bakary, W. (2002) Cross-cultural pragmatics: Strategy use in Egyptian Arabic and American English refusals. *Applied Linguistics*, 23-2, pp.163-189.
- ネウストプニー, J.V. (1981) 「外国人の日本語の実態(1)外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』45 pp.30-40
- Neustupný, J.V. (1985) Problems in Australian-Japanese contact situations. In Pride, J. B. (ed.) *Cross-cultural encounters: Communication and mis-communication*. Melbourne: River Seine publications, pp.44-64.
- ネウストプニー, J.V. (1994a) 「日本研究の方法論—データ収集の段階—」『待兼山論叢日本学篇』28 (大阪大学) pp.1-24
- Neustupný, J.V. (1994b) Problems of English Contact Discourse and Language Planning. In Kandiah, T. and Kwan-Terry, J. (eds.) *English and Language Planning: A Southeast Asian Contribution*. Times Academic Press, pp.50-69.
- ネウストプニー, J.V. (1997) 「プロセスとしての習得の研究」『阪大日本語研究』9 (阪大文学部日本語学講座) pp.1-15
- ネウストプニー, J.V.・宮崎里司共編著 (2002) 『言語研究の方法 言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』 くろしお出版
- 岡崎眸 (1995) 「日本語学習者における語用論上の転移再考」『東京外国語大学論集』50 pp. 97-109
- 大倉美和子 (2000) 「依頼のポライトネス—日本の大学生とメキシコの大学生—」『日本語と外国語との対照研究Ⅱ「日本語とスペイン語(3)」』(国立国語研究所) pp.211-240
- Rose, K. R. (1992) Speech acts and questionnaires: The effect of hearer response. *Journal of Pragmatics*, 17, pp.49-62.
- Rose, K. R. (1994) On the Validity of Discourse Completion Tests in Non-Western Contexts. *Applied Linguistics*, 15-1, pp.1-14.
- Rose, Kenneth R. and Ono, Reiko (1995) Eliciting speech act data in Japanese: The effect of questionnaire type. *Language Learning*, 45-2, pp.191-223.
- 柳慧政 (2004) 「日韓の依頼談話の対照研究—談話構成の面から—」『社会言語科学会第14回大会発表論文集』 pp.169-199

- Sacks, H., Schegloff, E. A. and Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50-4, pp.696-735.
- 鮫島重喜 (1998) 「コミュニケーションタスクにおける日本語学習者の定型表現・文末表現の習得過程—中国語話者の「依頼」「断り」「謝罪」の場合ー」『日本語教育』98 pp.73-84
- 笹川洋子 (2000) 「ブルガリア語・ドイツ語・ポルトガル(ブラジル)語の依頼方略の比較—楽しく丁寧に誘う依頼・強制しないように配慮する依頼・丁寧に共感を得る依頼ー」『親和國文』35 (神戸親和女子大國語國文学会) pp.139-179
- 施信余 (2005) 「談話レベルからみた依頼に対する断りの日台対照—親しい友人関係の会話データをもとにしてー」『社会言語科学会第15回大会発表論文集』 pp.16-19
- 高木美嘉 (2003a) 「依頼に対する「受諾」と「断り」の方法」『早稲田大学日本語教育研究』2 (早稲田大学大学院日本語教育研究科) pp.137-149
- 高木美嘉 (2003b) 「会話における待遇の方法—依頼者はどうやって意図を実現しようとするのかー」『早稲田日本語研究』11 pp.25-36
- 武田加奈子 (1998) 「接触場面の断り行動についてのケース・スタディ」『語文論叢』26 (千葉大学文学部) pp.13-28(94-79)
- 武田加奈子 (1999) 「接触場面における断り行動の談話—方法論を中心にー」『社会言語科学会第3回研究大会予稿集』 pp.108-113
- 武田加奈子 (2004) 「接触場面における勧誘応答の分析—勧誘者が被勧誘者の応答を断りと判断する要素ー」『接触場面の言語管理研究』 vol.3 (千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告) pp.35-54
- 武田加奈子 (2006) 『接触場面における勧誘談話管理』 千葉大学大学院博士学位論文
- 田中奈央 (2004) 「就学生における「待遇コミュニケーション」の実態と問題点を探る—依頼・許可求め場面のロールプレイによる考察ー」『早稲田大学日本語教育研究』5 (早稲田大学大学院日本語教育研究科) pp.125-140
- 田中優子 (2001) 「依頼表現の日独対照」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 46-3 pp.3-13
- Turnbull, W. (2001) An appraisal of pragmatic elicitation techniques for the social psychological study of talk: The case of request refusals. *Pragmatics* 1, pp.31-61.
- Ueda, K. (1974) Sixteen ways to avoid saying "NO" in Japan. In Condon, J. C. and Saito, M. (eds.) *Intercultural encounters with Japan: communication-contact and conflict: perspectives from the International Conference on Communication Across Cultures held at ICU in Tokyo*. Tokyo: Simul press, pp.185-192.
- 宇佐美まゆみ (1997) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『日本人の談話行動のスクリプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』 (H7年～H8年度科研報告書 研究代表者：西郡仁朗)
<http://japanese.human.metro-u.ac.jp/kokubun/mic-J/houkokusho/mojika.html>
- 宇佐美まゆみ (1999) 「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチー」『日本語学』 18-11 明治書院 pp.40-56
- 渡部倫子 (2004) 「日本語母語話者は何に注目して学習者の発話を評価するか」『日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するか』 (H12-15年度科研報告書 研究代表者：小林ミナ) pp.76-93

接触場面と言語管理の学際的研究

- 元智恩 (1999) 「日韓の「中途終了文」の丁寧さについてー断わる場面を中心としてー」『筑波応用言語学研究』6 pp.133-144
- 山口和代 (1996) 「コミュニケーション・スタイルと社会文化的要因ー中国人および台湾人留学生を中心として」『平成8年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp.112-117
- 山口和代 (1997) 「留学生の発話行為と文化的要因に関する一考察ー中国人および台湾人留学生を対象として」『異文化間教育』11 pp.125-140
- 山本富美子 (1997) 「母語干渉による異文化間コミュニケーション上の問題ー中国語系日本語学習者の中間言語分析よりー」『富山大学人文学部紀要』26 pp.225-237
- 任炫樹 (2002) 「日韓断り談話における初出あいづちマーカー」『ことばの科学』15 (名古屋大学総合言語センター文化研究委員会) pp.37-63
- 任炫樹 (2003) 「日韓両言語における断りのストラテジーー言語表現の違いとストラテジー・シフトを中心にー」『ことば:女性による研究誌』24 (現代日本語研究会) pp.60-77
- 任炫樹 (2004) 「日韓断り談話におけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」『社会言語科学』6-2 pp.27-43
- 横山杉子 (1993) 「日本語における『日本人の日本人に対する断り』と『日本人のアメリカ人にに対する断り』の比較ー社会言語学のレベルでのフォリナートークー」『日本語教育』81 pp.141-151
- ザトラウスキー, ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析ー勧誘の談話のストラテジーの考察ー』 くろしお出版

¹ 本稿は武田(2006)の一部を大幅に加筆、修正したものである。

² ロングマン応用言語学用語辞典(1988)南雲堂

³ 評価に関する研究でも日本語教師と教師以外の日本語母語話者では同じビデオを見ても評価の視点が違うという結果が出ている(小池1998, 渡部2004)。文法的な間違いなどはそのインターベンションに没頭しているときに気づきにくいが、ビデオでチェックする調査者や判定者は気づきやすいというのを筆者も以前の調査で感じた。

⁴ Beebe & Cumming (1996)はDCT, Gass & Houck (1999)はopen role playを採用している。Turnbull(2001)は実際に様々な調査方法を試し、比較した結果から、ロールプレイとExperimental techniques(Kaneko1992でのダミー・インタビューに相当)を評価している。

⁵ 依頼についてはHead Acts(依頼を遂行できる最小単位の要素), Alerters(呼びかけ等), Supportive Moves(依頼に付属し、負担を重くしたりやわらげたりする効果を発揮する要素)の大きく3つに分け、構成要素の分類を行っている。

⁶ 本人による調査の解説は金子(2002)参照。

⁷ フォローアップ・インタビューは、調査時の録音・録画資料を使い、その時にどのような意識があつて会話や行動をしていたかを調べるインタビューである。

⁸ 協力要請時には本来の目的は説明せず、会話の録音調査という名目で依頼している。

⁹ 勧誘に対する断りを分析している伊藤(2002)に、学習歴だけではなく滞日歴も社会的能力に影響しているという報告がある。

¹⁰ 出身国は、中国、インドネシア、韓国、モンゴル、タイ、ハンガリー、ロシア、エルサルバドル。

¹¹ 調査者からの指示がなくとも、NNS を誘うつもりでいた NS もいた。このような言語行動は強制できないため、誘う気分にならなかったので誘わなかつたという NS もいた。データに誘いが現れた会話のみを分析対象にしている。

¹² 談話上に現れず、勧誘者側が留意しない逸脱も存在するはずであるが、武田（2006）では会話の実際の参加者である勧誘者が、どのように勧誘談話を捉えているのか、被勧誘者の応答によりどのように勧誘の結論（承諾・断り・保留等）を得ているのかを分析するため、必ず談話、あるいは勧誘者本人から情報を得られると考えた。従つて、留意されない逸脱は省いている。

¹³ データの分析においても調査者による解釈作業が必要なため、フォローアップ・インタビューの信頼性はつねに保証されているわけではないという指摘（村岡 2004）や、言語社会心理学からは、フォローアップ・インタビューなどによる資料は、研究者の解釈の客観性・信頼性を保証するものとしては扱えないという指摘（宇佐美 1999）もある。

発話行為談話の調査・分析方法 付表

執筆者	年	題目	調査方法	調査対象	接 内
Ueda	1972	Sixteen ways to avoid saying "no" in Japan.	内省(一部MCQで検証)	日本語NS	- ○
森山	1990	「断り」の方略ー対人関係調整とコミュニケーション	MCQ	日本語NS	- ○
野村	1992	断りの表現ーコミュニケーションと含意	小説	小説	- ○
星野	1992	都合を聞かれたとき何と答えるか ー「申し出」の受諾と断りー	日本語DCT	日本語NS 日本語NNS	○ ○
Kaneko	1992	Responses to a request in Australia-Japan contact situations.	ダミーインタビュー	日本語NS オーストラリア人日本語NNS	○ ○
生駒・志村	1993	英語から日本語へのプログラマティック・トランスファー :「断り」という発話行為について	日本語DCT	日本語NS アメリカ人英語NS アメリカ人日本語NNS	○ ○
熊井	1993	外国人の待遇行動の分析(2)ー断り行動を中心にしてー	日本語ロールプレイ	日本語NS 日本語NNS (アジア圏留学生)	○ -
横山	1993	日本語における『日本人の日本人に対する断り』と『日本人のアメリカ人に対する断り』の比較	日本語ロールプレイ	日本語NS (英語話者・非英語話者)	○ ○
ザトラウスキー	1993	日本語の談話の構造分析ー勧誘のストラテジーの考察ー	自然電話会話	日本語NS	- ○
Kanemoto	1993	A Comparative Study of Refusal Assertion in the United States and Japan.	各国の出版物比較	書籍	- ○
魚住	1994	「断り」の発話と理解ー「考えておきます」に対する意識のずれを中心としてー	①母語自由記述式アンケート ②母語発話意図アンケート	日本語NS アメリカ人英語NS	- ○
目黒	1994	「謙遜型」断りのストラテジー	①日本語DCT ②聴解 ③インタビュー	日本語NS 中国・台湾人日本語NNS 韓国人日本語NNS	○ ○
藤森	1994	日本語学習者にみられるプログラマティック・トランスファー ー「断り」行為の場合ー	各国語DCT	日本・韓国・中国語NS 韓国人・中国人日本語NNS	○ ○
馬場・禹	1994	日中両語の断り表現をめぐって	母語DCT	日本語NS 中国語NS	- ○
Saeki & · O'Keefe	1994	Refusals and Rejections: Designing Messages to Serve Multiple Goals.	母語回答自由記述式アンケート	日本語NS アメリカ人英語NS	- ○
藤森	1995	日本語学習者にみられる「弁明」意味公式の形式と使用	同 藤森1994	同左	○ ○
カノックワン	1995	日本語における「断り」 ー日本語教科書と実際の会話との比較ー	①教科書分析 ②日本語自然電話会話	日本語教科書 日本語NS	○ ○
岡崎	1995	日本語学習者における語用論上の転移再考	母語DCT	日本語NS 韓国語NS 韓国人日本語NNS	○ ○
志村	1995	「断り」という発話行為における待遇表現としての省略の頻度・機能・構造に関する中間言語用論研究	同 生駒・志村1993	同左	○ ○
目黒	1996	日本語の談話における間接的断り理解の過程 ー母語話者の認知の視点からー	聴解	日本語NS	- ○
山口	1996	コミュニケーション・スタイルと社会文化的要因 ー中国人および台湾人留学生を中心としてー	①日本語DCT ②インタビュー	日本語NS 中国人・台湾人日本語NNS	○ ○
藤巻	1996	中国語話者と日本人の日本語による『誤解』 ー断りの表現を中心にー	アンケート(発話意図選択)	日本語NS 中国・台湾人日本語NNS	○ ○
カノックワン	1997	日本語学習者にみられる「断り」の表現 ー日本語母語話者と比べてー	日本語自然電話会話	日本語NS 日本語NNS	○ ○
山口	1997	留学生の発話行為と文化的要因に関する一考察 ー中国人および台湾人留学生を対象としてー	同 山口1996	同左	○ ○
劉・小野	1997	中国人日本語学習者に見られるプログラマティック・トランスファーー「断り」発話行為を例にー	①母語DCT ②DCT翻訳会話例への感想	日本語 中国語NS	- ○
内藤	1997	日本語の待遇表現「依頼」「断り」 ー日本語母語話者と日本語学習者とのコードの差異ー	①断り表現分類 ②聴解 ③断り時の心境アンケート	日本語NS 日本語NNS	○ ○
山本	1997	母語干渉による異文化間コミュニケーション上の問題 ー中国語系日本語学習者の中間言語分析よりー	日本語ロールプレイ	日本語NS 中国語系日本語NNS	○ ○
小野・劉	1998	異文化間のミスコミュニケーションに関する一考察 ー母語話者の断り表現をめぐってー	同 劉・小野1997	同左	- ○
西郷	1998	日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の印象 ー「断り」と「要求」という2つの言語行為を通してー	①ロールプレイ ②日本人による評価	日本語NNS	○ -
武田	1998	接触場面の断り行動についてのケース・スタディ	ダミー	日本語NS 日本語NNS	○ -
鮫島	1998	コミュニケーションタスクにおける日本語学習者の定型表現・文末表現の習得過程 ー中国語話者の「依頼」「断り」「謝罪」の場合ー	日本語DCT(母語回答並記)	台湾人日本語NNS	○ -
村井	1998	「断り」行為の日独比較-詫び表現、共感表現を中心に-	母語DCT	日本語NS ドイツ語NS	- ○
山口	1999	日本語における「断り」のストラテジー ー日本語母語話者と日本語学習者の比較	①ロールプレイ ②インタビュー	日本語NS アメリカ人日本語NNS	○ ○
李	1999	日・中・韓母語話者の「断り」行為の対照研究	母語DCT	日本語NS 韓国語NS 中国語NS	- ○
荒巻	1999	アメリカ人と日本人の断わり表現の比較	①母語DCT ②インタビュー	同左	- ○
林	1999	会話展開のためのストラテジー ー「断り」と「詫び」の出現状況と会話展開上の機能ー	電話会話文作成	日本語NS	- ○
元	1999	日韓中途終了文の丁寧さについて ー断わる場面を中心としてー	①母語自由記述式アンケート ②母語多肢選択式丁寧意識アンケート	日本語NS 韓国語NS	- ○
金	2000	「断り」談話の日・韓比較 ー社会的距離を表示するストラテジーをめぐって	自然電話会話	日本語NS 韓国語NS	- ○
元	2000	意味公式で分析した日本語と韓国語の断り	同 元1999	同左	- ○
邱	2000	日本語母語話者と中国人日本語学習者の「断り」の対照研究	①母語ロールプレイ ②アンケート ③インタビュー	日本語NS 中国語NS 中国語NS日本語NNS	○ ○

発話行為談話の調査・分析方法 付表

執筆者	年	題目	調査方法	調査対象	接 内
顧・趙・董	2000	会話における間接表現の日中対照研究	母語DCT	日本語NS 中国人中国語NS	- ○
任	2001	日韓の非言語コミュニケーションについて —断りを表明する場合を中心にして—	ドラマ分析	日本と韓国のテレビドラマ	- ○
伊藤	2001	ボライネットス理論の実証的考察—心理的負担の度合いを中心において公式の数値の観点から—	日本語・マレー語DCT	日本語NS マレーシア人マレー語NS マレーシア人日本語NNS	○ ○
伊藤	2002	マレー語母語話者の中間言語に見られる語用的特徴 —断り表現における普遍性と特殊性—	同 伊藤2001	同左	○ ○
伊藤	2002	マレー語母語話者の語用的能力と滞日期間の関係について—勧誘に対する「断り」行為に見られる工学系ブリットラのボライネットス	同 伊藤2001	同左	○ ○
加納・梅	2002	日中両国語におけるコミュニケーション・ギャップについての考察—断り表現を中心に—	母語アンケート	日本語NS 中国語NS 日本語NNS	○ ○
山口	2002	ボライネットスに応じた言語形式と人間関係の認知—中国人ならびに台湾人留学生と日本人母語話者との比較の視点	同 山口1996	同左	○ ○
任	2002	日韓断り談話における初出あいづちマークー	母語ロールプレイ	日本語NS 韓国語NS	- ○
藤原	2003	日本人とインドネシア人の「断り」に関する分析	①日本語・インドネシア語DCT ②open role play	日本語NS インドネシア人インドネシア語NS インドネシア人日本語NNS	○ ○
高木	2003	依頼に対する「受諾」と「断り」の方法	①母語自然電話会話 ②インタビュー	日本語NS	- ○
任	2003	日韓両言語における断りのストラテジー —言語表現の違いとストラテジー・シフトを中心に—	同 任2002	同左	- ○
元	2003	断わりとして用いられた「ノダ」—ボライネットスの観点から	断り表現ボライネットス度評定アンケート	日本語NS	- ○
ルンティーラ	2004	タイ人日本語学習者の「提案に対する断り」表現における語用論的転移 —タイ語と日本語の発話パターンの比較から—	日タイ語DCT	日本人タイ語NNS タイ人日本語NNS	○ -
任	2004	日韓断り談話におけるポジティブ・ボライネットス・ストラテジー	同 任2002	同左	- ○
任	2004	日韓断り談話に見られる理由表現マークー —ウチ・ソト・ヨソという観点から—	同 任2002	同左	- ○
村井	2004	「断り」行為において受け手が感じる不愉快度は何に起因するのか・親しい友人に対する場合—	MCQ(DCTで予備調査)	日本語NS	- ○
文	2004	断り表現における中日両言語の対照研究 —意味公式の発現頻度を中心に—	母語DCT	日本語NS 中国語NS	- ○
施	2005	依頼に対する「断り」の言語行動について —日本人と台湾人の大学生の比較—	①自然電話会話 ②アンケート	日本語NS 台湾人中国語NS	- ○
蔡	2005	日本語母語話者のEメールにおける「断り」 —「待遇コミュニケーション」の観点から—	①母語Eメール ②インタビュー	日本語NS	- ○